

C. S. ルイスと「神話」

—ルイス作品に見る「神話創作」としての
「キリスト教」

岡田 理香

目次

第一部

第1章 序

第1節 先行研究と考察対象とするテキスト

- (1) 従来のルイス研究の概略
- (2) 「神話」に着目する理由
- (3) 考察対象とするテキストの成立事情と先行研究

第2節 本論文のテーマを貫くもの——「神話」

第3節 本論文の構成

第2章 両大戦下と戦間期におけるルイス

第1節 戦間期のBBC ラジオと出版事情

- (1) 戦時下の状況
- (2) BBC 放送の役割
- (3) 読書文化の変遷
- (4) 『金枝篇』がもたらした影響
- (5) 「煉獄」という概念への関心

第2節 戦間期の宗教・思想状況

- (1) 哲学的潮流
- (2) キリスト教思想の状況

第3節 ルイスの友人たち

- (1) インクリングズの会——その成り立ち
- (2) メンバーの入れ替わり
- (3) 会の終焉

第3章 「キリスト教」へのルイスの道のり

第1節 『喜びの訪れ』に見られるルイスの原体験

- (1) 出自
- (2) 幼少期の「喜び^{ジョイ}」と呼ぶ体験

第2節 神話への傾倒

- (1) 北欧神話への憧れ
- (2) 「絶対的なもの」への取り組み

第3節 「回心」とされる体験

- (1) 「絶対的なもの」から神へ
- (2) キリストへの「回心」——トールキンとの対話
- (3) トールキンとの対話に関するルイスの書簡
- (4) 『天路逆程』

第二部

第4章 『天国と地獄の離婚』における新たな「煉獄」

第1節 「煉獄」の描写

- (1) 『天路逆程』のリンボ (Limbo)
- (2) 『マルコムへの手紙』での「煉獄」
- (3) 「ゲロンティアスの夢」

第2節 『天国と地獄の離婚』に見る「煉獄」

- (1) 物語の概要
- (2) 『天国と地獄の離婚』の物語の枠組み——レフリゲリウム
- (3) 「灰色の街」という名の「煉獄」

第3節 選択の重要性と「煉獄」

- (1) 何を選択するか
- (2) 「自己」の街としての「灰色の街」
- (3) 「自己」という街

第5章 『ナルニア国年代記』第7巻『最後の戦い』に見る「救済」

第1節 ファンタジーとは

- (1) トールキンにおける「準創造」
- (2) トールキンの「ファンタジー」理解
- (3) 「フェアリー・ストーリーについて」についてのルイスの反応

第2節 『ナルニア国年代記』の概略

- (1) 物語の概要
- (2) 『最後の戦い』の位置づけ

第3節 「救済」の描かれ方

- (1) 『最後の戦い』に描かれる「救済」
- (2) 別の神を信仰していた者の救い
- (3) 『最後の戦い』のエンディング

第6章 『顔を持つまで』に見る「天国」と「神話」

第1節 『ナルニア国年代記』各巻における「天国」

- (1) 『朝びらき丸東の海へ』
- (2) 『銀の椅子』
- (3) 『最後の戦い』

第2節 『顔を持つまで』の「天国」

- (1) プシューケーの物語
- (2) 「キリストのような人物」
- (3) 「宮殿」に見る「天国」

第3節 ルイスの「神話」

- (1) 「神話」により知る世界
- (2) ルイスの「神話創作」
- (3) ルイスの「天国」

第7章 結語

第1節 各章の内容

第2節 ルイスの「神話創作」について考察する意義——トールキンとルイス

- (1) 「準創造」
- (2) 別世界との連続性
- (3) 「キリストの物語」
- (4) 「キリスト教」

第3節 今後の展望

論文の要約

第1章 序

これまでの C. S. ルイス研究においては、神学思想との関連を見出すアプローチや、研究者個人のキリスト教信仰の視点から見た研究は為されている。だが、ルイス自身が「神話」と呼んでいるものや「神話創作」を取り上げつつ考察する試みはあまりされていない。本論文では、作家論、作品論を土台として物語論を用いた。そして作品を考察する際に「神話」をめぐる諸問題を念頭に置き、その上で以下の三点を課題とした。

第一に、「煉獄」である。ルイスの時代にはダンテの『煉獄篇』の流行があり、英国の作家の多くが『煉獄篇』を翻訳したり、「煉獄」をモチーフにした作品を執筆したりしていた。その中でルイスも「煉獄」を描写した作品を残しているため、本論文ではルイスの「煉獄」に着目した。

第二に、「煉獄」の先にあるものとして「救済」に着目した。ルイスの作品においては「煉獄」に加えて、「救済」の場面も描かれている。そのためルイスの「救済」観を紐解くことを第二の課題とした。

第三に、「救済」の先にあるものとして「天国」について考察した。ルイスは「天国」と捉えられる描写を作品の中で描いている。その「天国」は死後の世界・別世界であると同時に、今のこの世とつながっているものとして描かれている。そこで、この「天国」を第三の課題とした。

本論文ではルイスの作品を「神話」を基底に、「煉獄」、「救済」、「天国」の三点について考察した。

第2章 両大戦下と戦間期におけるルイス

考察の準備として、本章では作品生成の事情や当時の時代背景について述べた。

考察対象とする作品の大半は 1930 年代から 1950 年代に書かれ、この時期にルイスは大学で教壇に立ちながら執筆を継続していた。1930 年代にルイスはキリスト教へ「回心」したと公言し、「回心」をもとにして執筆した『天路逆程』を世に出した。これがルイスのキリスト教作品のはじまりであった。第二次世界大戦中には、ルイスは出兵を免れて疎開児童たちを自宅に受け入れていた。この頃に『ナルニア国年代記』などを執筆し、出版した。本章はこの時代の出版状況、宗教状況、ルイスの個人的交友関係等の状況を確認した。

まず、世界大戦当時のルイスの周辺の状況と、戦時下における英国放送協会の放送内容、また当時の出版物の傾向を概観した。当時の BBC ラジオが戦況を伝えており、出版界では貸本屋からペーパーバックへの販売への過渡期を迎えていたこと、研究者や著述家の間で

は神話研究が興隆し、「煉獄」の関心から「煉獄」に関する文学を生み出す状況が生まれてきたことなどを確認した。

そして、当時の宗教状況と作家たちがキリスト教へ回心した流れについて分析した。作家らにはルネサンスと呼ばれるようなキリスト教への回心がおこり、ルイスもその一人と見なされていることについて言及した。さらに、ルイスを取り巻くオックスフォード大学の状況と友人たちとの交流について述べた。そこでルイスは20世紀を代表する名作を残したことを確認した。

第3章 「キリスト教」へのルイスの道のり

本章では『喜びの訪れ』を中心に、ルイスの出自を確認し、彼の「喜び」と呼ばれる原体験、「回心」について考察した。

まず、『喜びの訪れ』において記された「喜び」と呼ばれる三つの原体験を確認した。また、少年期に「神話」を愛読したことと、ジョージ・マクドナルドの『ファンタステス』との出会いについて検討した。

さらに、ルイスの青年期の哲学思想を瞥見した後、『喜びの訪れ』で書かれている「回心」体験の記述を取り上げた。そこで、ルイスの「回心」は「キリスト教」から離れてまた「キリスト教」に戻ったとされていたこと、「回心」によって「喜び」は「キリスト教」へ取って替わったという記述を追った。そしてトルキンとの対話を拾い、「神話」がルイスの「キリスト教」に重要な位置を占めていたことを指摘した。

本章の後半には『天路逆程』に立ち入り、ルイスの「回心」について改めて考察した。そしてルイスの「回心」は、「神話」から「神話」への道のりであるという本論文における視点を提示した。また、ルイスの「キリスト教」の源が、彼の「神話」理解に見出せるものであることを指摘した。

第4章 『天国と地獄の離婚』における新たな「煉獄」

本章では「煉獄」について考察した。ルイス作品の『天路逆程』と『マルコムへの手紙』を概観した上で『天国と地獄の離婚』を取り上げ、それらに描かれている「煉獄」に着目した。本章によって次のことが明らかとなった。

第一に、ルイスの描いた「煉獄」はアングリカン教会の枠に吸収されえない「煉獄」で、ローマ・カトリック教会の教えとも異なるものであるということであった。その「煉獄」は、従来イメージされてきたものと別のもので、浄化される場の「煉獄」であった。

第二に、『天国と地獄の離婚』の「灰色の街」が「煉獄にも地獄にもなる」との記述は、救いが個人の選択によるとの提示であり、それは自己を選ぶか棄てるかという選択である

ことが明らかとなった。自己を放棄して新たな人間へと変えられることは、現代の我々にも通じるものであることについても言及した。

第三に、「灰色の街」とは結局、この世を表わしているものであることを述べた。それは我々の「自己」という名の街であり、我々の日常の生き方に訴えるもの、と解釈できた。

ルイスの「煉獄」は、従来のものとは異なる新しい「煉獄」であり、それは「神話」として描かれたものであると、本論文では見なした。

第5章 『ナルニア国年代記』第7巻『最後の戦い』に見る「救済」

本章では、トールキンとルイスのエッセイを概観し、『ナルニア国年代記』における「救済」について検討した。トールキンの述べた「準創造者」という考え方をルイスも踏襲していたことを確認した。その上で、「神話」を創作する行為についてのルイスの考えを確認した。その上で『ナルニア国年代記』に立ち入り、『最後の戦い』に描かれた描写を拾い、「煉獄」と「救済」との関連について考察した。さらにルイスの「煉獄」は、その人の生き方次第で「救済」される可能性を検討した。その「救済」とは神の主権の下にあり、神を求めるといふ個人の選択であると分析した。さらに『最後の戦い』に「煉獄」の性質があることにも光を当てた。

本章までで明らかになったことは、ルイスの作品は彼の「回心体験」が前提となって「救済」が描かれたということであった。また、神の創造に準じてルイスは「準創造者」として「神話」創作者となったことを本論文では指摘した。さらに、ルイスの「神話」では、別世界、死後の世界が提示されているが、その「神話」によって、独自の「煉獄」と「救済」が提示されている、と本論文では見なした。

第6章 『顔を持つまで』に見る「天国」と「神話」

本章ではルイスの「天国」について考察した。まず、『ナルニア国年代記』を瞥見し、「天国」とは特定の場所であり、自らの選択を経て入るところであるということを出した。さらに、「天国」とは神と合致した状態であると見なし、現実世界でも再現可能であることが明らかとなった。そして、ルイスの「神話」について考察を加えた。別世界とこの世とを架橋するものがルイスの「神話」であり、その「神話」を創作する行為とルイスの「天国」について分析した。

本章で検討したことは、「神話創作」行為の結果としてルイスの描く「天国」があったこととしてまとめられた。さらに、その「神話創作」行為そのものは、「準創造者」として神に倣うものであり、「天国」に準ずる行為であったと分析した。というのは「天国」に存在する者は神の意志に従う者だからであり、神の意志に従うならば、この世でも「天国」

を垣間見ることができるからである。そしてこの世に「天国」があるならば、「準創造者」がこの世で遍在することも可能であることについて言及した。

本章では、ルイスの「神話」が現実世界における人間の在り方を新たな側面から照射してくれるものと見なした。というのは、「神話」により人は目が開かれ、それまで持っていたものを壊して新しいものの見方、考え方を受け取ることができるからである。ルイス作品における「神話」は、人が持つ固定のイメージを壊し、新たな視点を与えるものであったと本章では指摘した。

第7章 結語

本論文の分析の起点となったのは、ルイスが「神話」を鍵とし、「回心」においてキリストの物語を「真実の神話」と表現したことであった。その後ルイス自身が「神話」を創作する者となったが、その「神話創作」とは創造者である神に倣う「準創造」行為として本論文では捉えた。

ルイスは、全ての神話群は神に由来するものと捉え、「神話」を創作した。「神話創作」は神の創造行為に倣うルイスの「準創造」行為であり、神との共同作業によるルイスの「神話創作」と呼ぶことができる、と本論文では見なした。また、ルイスの描く別世界は現実世界とつながっているものとして描かれているため、本論文ではこれらの別世界を、この世とのつながりを持つ描出とした。さらに、ルイスの「神話」によって、神の存在する場所とこの現実世界は連続性を持つと示唆されていると指摘した。

ルイスの「準創造者」として「神話創作」をする行為こそが、ルイスの「キリスト教」の顕著な特徴であったと本論文では判断した。